



TITLE:

静脩 Vol. 8 No. 3 (1971.12) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 8 No. 3 (1971.12) [全文]. 静脩 1971, 8(3)

ISSUE DATE:

1971-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65944>

RIGHT:



静脩

1971年 12月

Vol. 8, No. 3

The Kyoto University Library Bulletin

## 農 学 図 書 館

三 橋 時 雄

もう6年ほど前になるであろうか。東京大学の農学部図書館を館長の古島さんに案内してもらって見学したことがある。その時の偽らない卒直な感じは京都にもこんなのがあればという羨しさであった。ヨーロッパやアメリカの立派な図書館を見ても、先進国なんだからという一種の諦めのようなものがあって、羨しい気持はしてもそれほど切実なものではなかった。ところが身近かな東大の農学部中央図書館と別にこのような素晴らしい専門図書館があるのを眼のあたりにしては、心も動かざるを得なかったというわけである。

入口のロッカー、閲覧室の指定書コーナー、参考書コーナー、雑誌展示棚、それに複写室、マイクロリーダー・プリンター、新聞雑誌閲覧室はもちろん、他にグループ・スタディ・ルーム、個室、会議室およびゼミナール室、計算室もある。相当数の個席をもった開架式の書庫内には農業経済学科図書室にあった図書も収蔵されているので、自然科学系図書のほかに人文社会科学の図書も豊富で、中央図書館の機能を一部代替しうる感じであった。もちろん、それとともに専門図書館として、農学部で受け入れている主要な雑誌の新着号目次を印刷して希望者に速報したり、農学部図書館にない文献でも必要な時には他の図書館から借り出したり、複写のサービスもするし、文献が国内にない場合には海外への照会も引き受け、農学関係の研究活動にできるだけ役立とうとしていた。

京都大学の農学部も今では農学科、林学科、農芸化学科、農林生物学科、農業工学科、農林経済学科、水産学科、林産工学科、食品工学科の9学科となり、舞鶴にあった水産学教室も京都に移転してくることとなり、これに農場、演習林、農業簿記研究施設、農業研究施設を加えると、正に隔世の感がある大きな規模のものとなった。

農学部創設時からあった農学部図書室は棚橋初太郎先生以来、関係者のご努力により乏しい予算の中でこれまでよくその役割を果たしてきたものであるが、今やこの拡大された農学部の図書室としては相応しくないものになりつつある。したがって今ではこれを発展的に解消して比較的新しくできた諸学科の要求にも応えうる新時代の農学部図書館を早急に設置する必要がある。

しかもその場合、たんに京都大学の農学部だけのものとしてでなく、すでに近畿地区農学系図書館懇談会もできていることであるから、少くとも近畿7大学農学系図書館の相互協力活動のセンターとしての機能も十分に果たしうるものを造るべきである。

農業博物館やドイツのゲッティンゲン大学にあるフィルム研究所のようなものを京都に造ってはしいと願っているわたしはあるが、それと同時に、いやその前にまず今の農学部図書室と農学部各学科の図書を母体として、新しい時代の農学の内容に合致した近代的な農学図書館が京大の北部構内に中央図書館の分館として、しかも農学文献センターとしての機能も果たしうるようなものとして、一日も早く実現するようにと希望するものである。

(農学部教授)

## 大学図書館職員長期研修終る

大学における教育・研究活動の発展に伴い、大学図書館が、利用者の必要とする資料・情報を、迅速かつ適確に提供していくためには、図書館業務に関する最新の知識および技術を習得していくことが必要である。そのため、毎夏文部省の主催により、大学図書館における中堅職員を対象として、この研修が実施されているが、本年も7月19日より8月14日まで4週間にわたって開かれた。

本年の新しい試みとして、最初の5日間は赤城青年の家で合宿し、参加者による共同討議が行なわれた。第2週目からは、コンピュータ関係の見学や、参考業務の演習等の必要から、会場は炎暑の東京に移った。本学からは、附属図書館須原受入掛長、数理研坂東図書掛長、人文研山本図書掛長の3人が参加し、附属図書館岩猿事務部長は講師として参加した。

## 近畿地区大学図書館協議会企画委員会

〈とき：昭和46年9月10日 ところ：大阪大学中之島分館〉

本年秋以降に実施する各種の研究集会の実施計画をたてるため開催され、つぎのとおり決定した。①受入業務に関する研究集会 とき：10月26日（火）10.30～16.00 ところ：大阪大学松下会館 どのように資料を選ぶか、それをどのように合理的に受入するかについて、会計的な面も含めて、事例発表にもとづき討議していく。事例発表：国立大一大阪大、公立大一大阪市大。②図書館施設に関する研究集会 9月2日に、大阪大学吹田分館で第1回のこの研究集会を実施したが、その際の意見にもとづき、12月上旬に第2回目を開催する。③参考業務に関する研究集会来年1～3月の間に、できれば1回実施する。具体的なプランは未定。

## 第45次国立七大学附属図書館協議会

〈とき：昭和46年9月21日～23日 ところ：大阪大学待兼山会館〉

この会議は、日本における国立大学図書館関係の会議としては、もっとも古い歴史を持つもので、本年度第45回を大阪大学の当番で開催した。

初日21日は部課長会議で、文部省からの出席も得て、職員定員問題等が、事務レベルでまず討議された。京大提案議題のうち、学術雑誌総会目録の今後の刊行については、もはや手作業による編集は不可能で、電算機による目録の編集が強調された。また、同じく京大提案の教育課程文庫（教育学部保管）の問題については、七大学中、北大、東北大、九大、京大の4大学に設置された本文庫は、いずれも、その蔵書が大学の蔵書とされていないので、大学の蔵書にできるよう、至急に文部省内で検討を進めてもらうことになった。

22日から23日午前までが本会議で、7つの議題が討議された。ここでも、定員の問題が種々協議されたが、京大より提案された「学術情報流通体制の強化とNIST計画」の問題には、論議が集中した。国立75大学の蔵書数は3千万冊を越えるが、七大学を含むA級9大学で、約その半分を所蔵している。このことからみても、七大学に対する情報要求は、必然的に増大しつつあるが、これに対応する体制は、まことに不十分である。一方NIST計画の提案が科学技術会議よりなされているが、今後この計画はどのように実現されるのか、また、もっとも強力な情報源である七大学としては、どのように考えるべきかについて協議されたが、NISTの具体化がその後明確にされていないこともあって、結論には至らなかった。

## —特集— 閲覧室の現状と問題点（その1）

図書館施設には、本を置く場所と本を読む場所とが重要な位置を占めている。本を置く場所（書庫）については、静修7巻6号で特集して現状報告を行なったので、今回は本を読む場所（閲覧室）の現状をさぐり、その問題点にも触れてみたい。

まず、附属図書館から始めて、部局図書室、学科図書室もたずねることにする。

### 1. 附属図書館の現状と問題点

附属図書館の閲覧室と席数は、第1閲覧室394席（2階）、第2閲覧室92席（1階）、参考図書室44席（2階）、新聞閲覧室15席（2階）特別閲覧室6席（2階）、計551席となっている。これは学内の図書館施設のなかでは最高の席数である。

第1閲覧室、新聞閲覧室は数年前から暖房に加えて冷房設備も整っている。第2閲覧室も3年前に開設されると同時に冷暖房完備のため利用者も多く、満席のことが多い。本年8月下旬には、参考図書室、特別閲覧室にも冷房設備が取付けられ、直接、利用者が使用する施設はすべて冷暖房設備が完備したことになる。例年夏期は、参考図書室は30度を越す暑さのために、とても参考図書（約5,200冊）などひもどけるような状態ではなく、ひところ、二重天井張で暑さをしのいでいたが効果がなく、今夏ようやく関係当局のご配慮で宿願が達成された。

本年は冷房期間も短く十分な効果をあげられなかったが、来夏からは快適な閲覧室をかねて利用されることだろう。

しかし、ほかに問題がないわけではない。第1閲覧室を例にあげれば、昭和39年にその一部をさいて開設した12,000冊（現在）の開架室のために、閲覧机間の間隔が狭くなって利用者の出入りに不自由である。これは、他の図書館の席数が少ないため、本館として一席でも席数を減らせなかった事情にもよる。

では、本部地区の席数はどうであろうか。本部地区の法・経・文・教育・工各学部の閲覧席数比は、工学部が学生数（院生を含む）3,279名に対し304席（昭和45年5月現在）で9%、工学部を除く他部局は、学生数2,759名に対し154席で6%となっている。昭和45年度の附属図書館の利用者数（閲覧・貸出）の内訳は、本部地区の利用者数が43.7%、教養部学生が40.2%を占め、その他16.1%である。教養部を除くとその大部分は本部地区の学生であることがわかる。したがって、附属図書館の閲覧席数の $\frac{1}{2}$ を本部地区の学生にふりあてて計算すると、6,038名に対し、席数は、304席（工学部）+154席（工学部を除く部局）+375席附属図書館の $\frac{1}{2}$ =733席となり、その席数比は12.1%となる。

利用対象者に対する席数比は「大学図書館施設計画要項（文部省管理局教育施設部）」によれば、学部学生で20%、院生で30%であるから、京大は、まだこの基準に程遠いといえる。前記の学部の閲覧席数のうち、特に教官用と定めているのは、附属図書館6席、教育学部12席だけである。基準では30%となっているが、教官の場合は個人研究室をもっているからここでは対象外とする。

以上のことから、附属図書館の席数を減らせなかった事情から、第1閲覧室1人当りの面積は狭く、6人席となっているから出入りするたびに席を動かなければ通れないほどで、ユッタリした落ち着いた雰囲気読書できる場所とはいえない。

47年度内には、法経両学部約200席の閲覧室が開設される予定（現在、法学部0席、経済学部10席）であるから、少しは緩和されるであろう。

室温、席数のほか、1人当りの面積、空気調節、照明度など多くの点に問題が潜んでいるが、紙面の都合からつぎの機会に譲る。

## 社 会 主 義 国 図 書 展

さる、11月16日（火）～18日（木）の3日間、本館の展示室において附属図書館と社団法人出版文化国際交流会の主催により図書展が開かれた。

この図書展は、これまでわが国に紹介される機会の少なかった社会主義国の図書を広く一般に公開するためのもので、全国では東大と京大の2か所で行なわれた。日頃、目にふれる機会の少ない図書だけに、会期中の参観者も多く有意義な催しであった。

参加国と出品点数はつぎのとおりであった。

ブルガリア	192
キューバ	207
チェコスロバキア	286
東ドイツ	465
ハンガリー	109
北ベトナム	539
ポーランド	48
ルーマニア	420
ソビエト	319
9カ国	計 2,585点



## 資料のさがし方と利用の手続

### その1 あなたが所属する学部（または学科）にないとき

あなたの希望する資料が所属の学部（または学科）になく、他の部局にあるとき、「図書相互利用書」でその資料を利用することができます。その約定は前号（8巻2号の「図書相互利用書の申合せ」）でお知らせしましたので今回はその利用方法について説明いたします。

A まず、あなたが所属する学部（または学科）図書室に、あなたの希望する資料があるかないかをさがして下さい。各図書室には雑誌・単行本など所蔵する資料の目録が揃えてあります。

所属学部がないときはあなたの希望する資料が、

A-1 雑誌であれば、京都大学雑誌総合目録の和文篇、欧文篇（自然科学・人文科学）などによって、その雑誌が他のどの部局でもっているかがわかります。

A-2 単行本であれば、附属図書館（1階カード目録室）の「全学総合目録（和・洋別）」でさがすことができます。

B 所蔵箇所がわかれば、あなたが所属している学部（または学科）図書室から「図書相互利用書」を発行してもらって、資料を所蔵する部局図書室へ身分証明書と印鑑を持参すれば利用できます。利用する前に、現在貸出になっていないかどうかを確かめてから利用先の図書室へ行くようにして下さい。

C 貸出冊数および期限は、申合せとして

自然科学系部局資料 3冊、1週間以内。

人文・社会科学系部局資料 3冊、2週間以内。

雑誌 3日以内 となっています。

各図書室で規則が異なりますからそのつど確かめて下さい。

D 図書を返却したら「図書相互利用書」の1枚に返却印をもらって、所属部局の図書室へ必ず返して下さい。

E 「図書相互利用書」を必要としない図書館があります。

附属図書館、医学図書館、農学部図書室です。身分証明書は必ず持参して下さい。

F 必ず、期限内に返却して下さい。あなたが希望するように、ほかにも多くの人が利用したいと望んでいるのです。資料はみんなのものです。

## その2 学内にないとき

京都大学内に希望する資料がないときは他の機関を利用するほかありません。図書館間では、相互利用（閲覧）・相互貸借（貸出）の申し合せを行なって利用の便宜を図っています。したがって、あなたが希望する資料の所在を何らかの方法で調査し、所在が確認できたら、所定の手続をとれば、閲覧または複写によって利用ができます。機関によっては貸出も可能です。

以下そのことについて説明いたします。

### A 資料の所在の調べ方

本館の参考図書室（2階）に備付の各大学の所蔵目録、公共図書館の蔵書目録、国立国会図書館の所蔵目録、Union Catalog of Foreign Books（新収洋書総合目録）などで探すことができます。そのほか、特定主題—東洋学・経済学など—から探す目録も揃えてあります。解らないことがあれば**参考掛**（Tel 2233）におたずね下さい。

### B 資料の所在がわかったら

- (1) 直接その図書館へ出かけて利用する（閲覧）。
- (2) 先方へ行かないで、複写を申込む。
- (3) 先方へ行かないで、貸出してもらう。

の3つの方法があります。

- (1) **直接その図書館へ出かけて利用するときは**、あらかじめ先方に了解を求めてから利用するのが建前となっています。学内の方なら誰でも申込める方法として、近畿地区では、「近畿地区国公立大学図書館協議会の文献相互利用申し合せ」があります。これは本館の**参考掛**（2階）がその窓口です。

その他の地区については、利用先の図書館長宛の依頼状（**閲覧貸付掛** Tel 2232で発行）で利用できます。

- (2) **複写を申込むときは**、**文献複写室**（1階 Tel 2230）で受付けています。文献の複写は学内の資料だけではありません。学外の機関の資料も取扱っています。国公立大学、私立大学、その他民間の研究所など、複写の申込みが可能なところは、すべて受付けています。

- (3) **貸出してほしいときは**どうするか。現物をどうしても手元で見たいときは、その方法として「相互貸借」があります。しかしこの方法が可能な図書館は、現状では国立大学（全国国立大学図書館の「文献相互利用申し合せ」）と国立国会図書館（国立国会図書館図書利用規則）となっています。この窓口は、**参考掛**（Tel 2233）です。

利用のための申し合せはつぎのとおりです。（抜すい）

#### イ) 国立国会図書館

冊数：1大学1期間に5点以内。

期間：1カ月、ただし図書の発送日より到着の日まで。

更新：認めない。ただし、館長が特に必要と認めたときは、この限りでない。

費用：返送の費用は申込者負担。

#### ロ) 国立大学

冊数：10冊以内。

期間：20日以内、現物発送の日から返納到着の日を含む。

延期：延期を希望するときは期限前に申出ること。延期期間は10日以内。

費用：往復の送料は自己負担。

注：雑誌は取扱わない。

詳しいことは掛におたずね下さい。

### C その他 特定の所属の方のためにはつぎのがあります。利用については所属学部の図書室におたずね下さい。

医学部関係：医学図書館協会相互貸借規約

薬学部関係：日本薬学図書館協議会文献相互貸借規約（案）

農学部関係：近畿地区農学系図書館懇談会の図書相互利用について



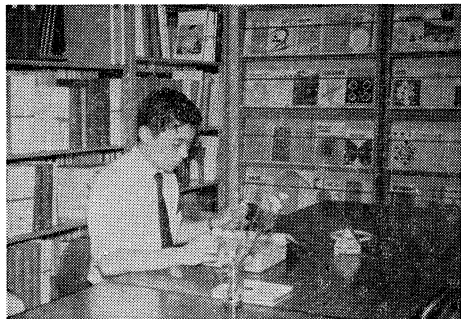
### 農学部 林産工学雑誌室

林産工学雑誌室は昭和42年5月に発足し、林産工学教室3階の東南隅にある。ここには各講座で必要とする雑誌を林産工学共通経費で購入しており、単行本はおいていない。購入雑誌数は和書40種類、洋書45種類で年間予算は約100万円である。

利用形態は開架式であり、利用者は書籍を自由に見ることができる。約24㎡の部屋に書架、閲覧机、職員(1名)用机等が置いてありかなり狭い。ゼロックスは1台、下の一廊隅においてある。

購入雑誌の数が和洋合わせて85種と比較的多いのは当学科の性質として物理、化学、生物、林学、機械工学等々と、幅広い分野と関係があるためである。

当学科自体、発足後間がないので雑誌の種類は多くても、バックナンバーはそろっているとはいえず、今後、完備していく方針である。また、雑誌によってはほとんど利用されていないと思われるものもあるが、これは林産工学に関する世界中の雑誌をで



あとがき：編集の不幸際で、3号が46年の最後となったことをお詫びします。

本年は国内外ともにあわただしい一年でした。図書館界も、中教審答申、社教法改正の動きなど「図書館とは何か」と問いなおすべき重要な時期となっていると感じるのは私一人でしょうか。機械化、情報化社会といわれるなかで、図書館の役割とは何か、図書館員は何をする者か。今こそ考えなおすべき時ではないでしょうか。

特集として「閲覧室の現状と問題点」を企画しました。閲覧室が図書館にとって重要な施設でありながら、京大のような古い大学では忘れがちではなかったでしょうか。みなさんとともにみつめてみたいと思います。(武内)

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 8, No. 3 (通号42号) 1971年12月25日発行・編集発行人：  
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111 (内線) 2220-2238

(268)

きただけ集めようという目的のためでもあるが、他学部、他学科の図書を利用することが比較的多いという現状も考えあわせ、現在購入中の雑誌を再検討すべき時期にきている。

### 工学部 高分子化学図書室

高分子化学図書室は、昭和16年4月繊維化学教室として設立され、翌17年西部構内に木造2階建の一隅を占めていたが、昭和43年工学部4号館増設に伴ない南中央2階に移転、現在に至っている。書庫・オフィス・閲覧室(教官・学生)の4室で総面積は133㎡、蔵書は約4,800冊、購入雑誌は和洋合わせて65種、図書費は約170万円、1968年より外国雑誌の新規購入により予算の70%まではそれにあてられ、その残額でシリーズ図書を購入している。利用者の要求される単行本の購入が限られた予算では今のところ購入が困難である故に図書費の増額を利用者は切に希望している。

利用形態は開架式であり 利用者は自由に書庫に出入できる。利用者は1日平均30名、複写設備として本年4月よりゼロックスを設置、さかんに利用されている。職員は2名である。

目録体系は教室独自の手法であるため、手軽に文献を探索できるよう目録の充実を計り、できるだけ利用者の希望に応えたいと努力している。

